

聖書: ヨシュア記 7:1-26

説教題: 石くれの山を

日時: 2010年5月30日

イスラエルは前の6章で、エリコでの戦いにおいて見事な大勝利を取めました。エリコは城壁にしっかりと守られた町で、どこからも付け入る隙はなかったのに、主の命令に従ってその町の周りを行進するだけでエリコの城壁は崩れ落ちました。さて、エリコに勝ったなら、その調子で次の町アイも勝ち取ろうとイスラエルは進んで行きます。次の町アイはエリコよりずっと小さい町です。エリコに勝ったイスラエルなら、難なくこの町を攻め取れると誰もが思ったことでしょう。ところが彼らは今日の章でまさかの敗北を喫します。アイを偵察した人々は3節で「民を全部行かせないでください。二、三千人ぐらいを上らせて、アイを打たせるといいでしょう。彼らはわずかなのですから、民を全部やって、骨折らせるようなことはしないでください。」とヨシュアに報告し、余裕しゃくしゃくで臨んだはずなのに、結果はアイの前に惨敗。36人の犠牲者を出してしまった。エリコを制覇して前途洋々、自分たちには明るい未来だけがあると信じ切っていた彼らは、高い雲に乗っていた状態から一転して暗い谷底へ突き落とされてしまったのです。

一体何故彼らは今回、予想外の敗北を喫してしまったのでしょうか。ある人はイスラエルが自信過剰に陥っていたからだと言います。アイを偵察した斥候たちは「アイの住民はわずかなのだから、民を全部行かせる必要はない。わずかな戦力とわずかな時間で十分だ!」と判断しました。ここに勝利の後に陥りやすい慢心の罠があったと言うわけです。また他のある人は、ヨシュアは今回の戦いで主の御心を伺ったり、主の指示を受けてから行動する、ということをしていないと言います。その最も基本的なことをおろそかにして、ただ人間の側近たちと相談し、彼らの勧めに従ってしまった、と。しかしヨシュア記7章は、それが原因であったとは説明していません。真の原因はヨシュアに対する神の言葉の中に説明されています。

ヨシュアは着物を裂き、イスラエルの長老たちといっしょに、主の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、頭にちりをかぶって、7節以降でこう言いました。「ああ、神、主よ。あなたはどのようにしてこの民にヨルダン川をあくまでも渡らせて、私たちをエモリ人の手に渡して、滅ぼそうとされるのですか。私たちは心を決めてヨルダン川の向こう側に居残ればよかったのです。ああ、主よ。イスラエルが敵の前に背を見せた今となつては、何を申し上げることができましょう。カナン人や、この地の住民がみな、これを聞いて、私たちを攻め囲み、私たちの名を地から断ってしまうでしょう。あなたは、あなたの大いなる御名のために何をなさろうとするのですか。」ヨシュアが憂えていることは、小さな町アイにイスラエルが敗れたというニュースをカナン人たちが聞くなら、そのしなえていた心も回復し、彼らは自分たちに向かって来るだろうということです。相手はもともと背が高い、力強い民族です。馬力を持った彼らが勇気を奮い起こしたら、戦いは一層困難になる。そうしてイスラエルが滅びてしまうなら、ヨルダン川を渡って来ない方がまだましだった!主よ、あなたは一体何をなさろうとしているのですか、とヨシュアは訴えます。

これに対して主はなぜ今回の戦いでイスラエルがよもやの敗北を喫したのか、その理由を10節以降で説明されます。それは一言で言って、「イスラエルが罪を犯した」からです。11~12節:「イスラエルは罪を犯した。現に、彼らは、わたしが彼らに命じたわたしの契約を破り、聖絶のものの中から取

り、盗み、偽って、それを自分たちのものの中に入れさえた。だから、イスラエル人は敵の前に立つことができず、敵に背を見せたのだ。彼らが聖絶のものとなったからである。あなたがたのうちから、その聖絶のものを一掃してしまわないなら、わたしはもはやあなたがたとともにはいない。」 彼らは6章18節で、こう命じられていました。「ただ、あなたがたは、聖絶のものに手を出すな。聖絶のものにしないため、聖絶のものを取って、イスラエルの宿営を聖絶のものにし、これにわざわいをもたらさないためである。」 このはっきりと命じられた主の命令をイスラエルの中のある者が無視し、取ってはならないものの中から取り、盗み、ひそかに着服したのです。そして自分自身が聖絶のものとなった。それゆえに主は彼らに勝利を与えなかった。

ここに罪を持ったままでは主に祝福して頂くことはできないという真理が示されています。聖なる神は罪と同居することができません。従ってもイスラエルの内に罪があるなら、そのイスラエルと主はともにいることはできない。主ははっきりと12節後半で「その聖絶のものを一掃してしまわないなら、わたしはもはやあなたがたとともにはいない。」と言っています。

さてどうしたら良いでしょうか。主はご自分が共にいる祝福を回復するには、聖絶のものを盗んで聖絶のものとなった者を、あなたがたのうちから取り除かなくてはならない、と言われます。そしてそれが誰であるかを示す方法として、くじを用いられました。まず部族ごとに進み出る。そして取り分けられた部族は、次に氏族ごとに進み出る。そうして取り分けられた氏族は、家族ごとに進み出る。そして取り分けられた家族は最後に男一人一人が進み出る。これは罪を犯した本人にとっては恐怖のプロセスです。大勢の中に紛れ込んでいて、まさかその中の私一人を言い当てることは難しいだろうと思っても、確実にその範囲は狭められて行く。まず自分の部族が取り分けられる。次に自分の氏族が取り分けられる。さらに自分の家族が取り分けられる。次第次第に焦点が自分一人に向かって絞られて行きます。これは主はすべてを見て知っておられ、主の目の前にはすべてがさらけ出されていること、その罪は御前に決して隠し通せないことを、本人はもとより、そこに立ち会うすべての人に明らかにするものだったでしょう。

こうしてついにユダの部族のゼラフ人、ゼラフ人の中のザブディの家族、ザブディの家族の中のカルミの子アカンが取り分けられます。ヨシュアは彼に「わが子よ。イスラエルの神、主に栄光を帰し、主に告白しなさい。あなたが何をしたのか私に告げなさい。私に隠してはいけません。」と言います。アカンは自分の罪を告白します。彼の言葉に従って、彼の天幕を捜索してみると、確かに銀や外套や金の延べ棒が出て来ました。このことによって彼が聖絶のものを盗み、彼自身が聖絶のものとなったことが確認されました。そして彼への裁きが実行されます。彼とその子供たち、また彼の所有物全部が、アコルの谷へ連れて行かれます。そして全イスラエルが立ち会う中、石で打ち殺され、彼らのものは火で焼かれ、その上に石くれの山が積み上げられました。これを読んで私たちはここまでしなければならぬのか？アカンは罪を認めて告白したのではなかったか？その彼に赦しはないのか？と問いたくなります。しかしこの聖絶のことについては、これまで何度も繰り返し語られて来たことを私たちは良く考えに入れるべきでしょう。聖絶のものを取ったら、その人自身が聖絶のものになる。その念には念を押して語られて来た命令をアカンは全く無視して、これくらいは大丈夫だろう、と主を侮ったのです。これは主の御言葉を適当にあしらって、自分の好きなように生きようとする態度です。またアカンは「聖絶のもの」となった人を見分けるくじが行われる中で、最後まで知らんぷりを通しました。罪を認めたと言っても、最後に自分が取り分けられ、もうどうにも逃れられない状況になった

時に、です。どんな罪を犯しても、最後の瞬間に「私は罪を犯しました」と口で告白すれば、ギリギリセーフで何でも赦されるというのではない。さばきが下りそうな直前に「私は罪を犯しました」と急いで言えば、神は私を裁けなくなる、というのではない。故意に御言葉に逆らい、その戒めをぞんざいに扱う歩みの最後はこうなるのです。その意味でこのアカンの上に積み上げられた石くれの山は重大なメッセージを語るものです。これは4章で見た、12の石の記念碑と一緒に考えられるべきものです。あの記念碑は、ヨルダン川を渡らせて下さった主の真実をあかしします。主がイスラエルと共にいて、恵み深く導いて下さったことを、それを見る者に語ってくれます。しかし同時にイスラエルはアカンの上に積み上げられた石塚も見る必要があります。主を侮って、その御言葉に聞き従わず、自ら聖絶のものとなった者は、たとえイスラエルの内部にいた者でも、このような最後を刈り取るのである、ということ。

最後の26節には希望のメッセージが示されています。「そこで、主は燃える怒りをやめられた。」という言葉です。主はいつまでも怒っておられるのではない。正しい処置がなされるなら、主の臨在の祝福が再び回復されるのです。そこにイスラエルのこれからの歩みのすべての希望があります。

果たして私たちは今日の章からどのように導かれるべきでしょうか。今日の章がはっきりと語っているメッセージは、私たちが罪を隠し持っているなら、主の祝福に生きることはできないということです。さらには大変なわざわいを身に招かなければならないかもしれない。私たちも、アカンの上に積み上げられた石くれの山を見て、教えを受けるべきです。罪を隠し、保つ者の生活には、このような最期が待っているということ。ですから私たちは神の憐れみがある間に、急いで罪の解決をする者でなくてはならない。私たちは私たちの罪のために、聖なる神がご自分の一人子イエス・キリストをまさに聖絶の死に渡して下さったことを知っています。その方において私たちではどうにもできない罪を解決し、取り除いて下さる。私たちはそのキリストのところに行って、その十字架の死は私の罪の身代わりであったことを告白し、罪の赦しを頂くべきです。そして大事なことは、主の御言葉に従う正しい歩みへ進むことです。もちろん地上にある間、私たちは罪を犯し続けます。しかしだからと言って、罪の生活を肯定し、そこにとどまっていたはいけません。そうした生活の行く先に、アカンの石くれの山があります。そうではなく、自分の罪に気づくたびにキリストのもとに行って、赦しの恵みにあずかるべきです。1ヨハネ1章9節：「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」私たちはその時、罪を赦していただけるばかりか、さらに私をきよめて下さる主の力にあずかることができる、と約束されています。その恵みを頂いて、私たちは罪から離れる新しい生活へ進むことができます。そこに主が共にいて下さる祝福は豊かに回復されるのです。

私たちはアカンのように何か主の前に隠していることはないでしょうか。処理されないまま残っている罪、いや残したいと思ってそのままにしている罪はないでしょうか。その罪が私たちの内にとどまっている限り、私たちに勝利はやって来ません。どんなに小さな町アイが相手でも、私たちは背を見せて逃げなければならなくなります。私たちは自分を振り返り、そのような罪を持っていることを思うなら、直ちにその罪を主に解決して頂く者でありたい。グッドニュースは、その罪が正しく処理されるなら、主は怒りをやめられる。そしてインマヌエルの祝福が戻って来るとのことです。それは私たちが罪を保つことによって得ている一時的な祝福よりもはるかに大きな、どこまでも広がる祝福です。私たちは自分の罪を急いでキリストのところに行って取り除いて頂き、主のご臨在の

もとで歩む祝福へ導かれて行きたい。そしてどんな敵や課題を前にしても、共にいて下さる主によって、私たちの思いをはるかに越える主の力と祝福に導かれて行きたいと思います。